**「ラーマクリシュナの福音」勉強会　第９２回　（２０２３年２月１４日）**

**・勉強範囲：「第四章　在家の人への助言」４６頁**

**～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～**

**📖４６頁上段　後ろから４行目**

**M「師よ、もっと金を稼ぐ努力をしてもよろしゅうございますか」**

**師「宗教的な家族を養うためにそうするのは許されることだ。収入をふやす努力をしてもよろしい。ただし正直な方法でせよ。人生の目標は金を稼ぐことではなく、神に仕えることだ。もし金が神への奉仕にささげられるならそれは有害ではない」**

**（解説）**

**家住者が金銭を稼ぐことについての助言**

Mさんは（出家者ではなく）在家の信者で、家族を養う義務を持つ家住者でした。この質問は家住者にとって大事な質問です。シュリー・ラーマクリシュナの話には「肉欲とお金はよくない」という話が何回も出てきます。富の放棄についても話たりしています。そのうえご自身は金銭に触れることもできませんでしたから、その様子を目の当りにしてきた信者が「自分はお金を稼いでよいのだろうか？　稼いだとしても、その限度はあるのだろうか？」という疑問を持つのは当然でしょう。

一方で一般的な人は、Mさんの疑問とは違い、お金があれば生活水準が上がってより良い暮らしができると考え、仕事はラクではないがお金を稼ぎたい、今稼いでいるよりもっと稼ぎたい、という目的で働きます。彼らの心中は「もっと稼ぎたい、もっと稼ぎたい」でいっぱいで、仕事を２つ、３つと掛け持ちする人までいます。

シュリー・ラーマクリシュナの答えは何でしたか？

参加者　「宗教的な家族を養うためにそうするのは許されることだ。」

宗教的？　ベンガル語の原著は「ヴィッディヤー」という言葉を使っていて、その部分は「ヴィッディヤーの家族を養うために、そうするのは許されることだ。」と言っています。「宗教的な家族」という日本語訳で、これから説明するイメージを読者が得られるかどうかちょっと私にはわかりません…。「ヴィッディヤーの家族」について説明をします。

『ラーマクリシュナの福音』の中には「ヴィッディヤーの○○、アヴィッディヤーの○○」という話がよく出てきますね──ある種類の奥さんはヴィッディヤーの奥さんで、ある種類の奥さんはアヴィッディヤーの奥さんだとか、ある種類のお母さんはヴィッディヤーのお母さんで、ある種類のお母さんはアヴィッディヤーのお母さんだとかという話です。「アヴィッディヤーのお母さん」とは、自分の子供が神について考えたい、その目的で神聖な場所に行きたい、神聖な交わりが欲しいと思っていても、それを反対したり妨害したりするお母さんのことです。その種類のお母さんを、シュリー・ラーマクリシュナは「アヴィッディヤーのお母さん」と言いました。

『ラーマクリシュナの福音』の１つの特徴が、ヴィッディヤーとアヴィッディヤーという言葉で説明をすることです（他の聖典ではサットワ、ラジャス、タマスという言葉で説明するものがほとんどです）が、そのように話をする時、ベースとなっている概念が、ヴィッディヤー・マーヤーとアヴィッディヤー・マーヤーです。

それは何でしょうか？　簡単な説明は、「ヴィッディヤー・マーヤーはサットワ、アヴィッディヤー・マーヤーはラジャス・タマス」というものです。『福音』の中に「三人の盗賊」の話がありますね？　サットワ・グナは私たちを解脱まで導き、ラジャスとタマスのグナは私たちを束縛します。

［👉『ラーマクリシュナの福音』ｐ166より引用］三つのグナはサットワとラジャスとタマス、その中でサットワだけが神への道を示す。それでもサットワにさえ、人を神までつれて行くことはできない。

　一つ、話をききなさい。あるとき、一人の金持ちの男が森の中を歩いていた。そこへ三人の盗賊が現れて彼の持ち物すべてを奪った。そのあとで中の一人が、『この男を生かしておいてなんになる、殺してしまえ』と言った。そして剣をぬいて斬ろうとしたとき、第二の男がこれを止めて言った、『殺してもなんにもならない、縛っておこう。そうすれば警察にとどけることもできまい』そこで彼らはこの被害者を固く縛り、その場に残して立ち去った。

　しばらくすると第三の男が金持ちのところへ戻ってきて、『ああ、ひどくけがをなさったのではありませんか。さあ、縄を解いてあげます』と言った。この盗賊は金持ちを森の外につれ出し、『この道をまっすぐにお行きなさい。らくに家に帰れます』と教えた。『いや、君もいっしょにきてくれ。これだけ親切にしてくれたのだ。家の者たちも君に会ったら喜ぶだろう』と金持ち。だが盗賊は、『いいえ、それはできません。警察につかまります』と言って、相手によく道を教えたあと、去った。

　さて、『この男を生かしてなんになる。殺せ』と言った第一の盗賊は、タマスである。それは破壊する。第二の男はラジャスだ。人をこの世に縛りつけ、さまざまの活動に巻き込む。ラジャスは人に神を忘れさせるのだ。サットワだけが神への道を示す。それは慈悲、正義、信仰のような諸徳を生むのだ。

このサットワ、ラジャス、タマスのアイディアは、マーヤーにも当てはめることができて、ヴィッディヤー・マーヤーは私たちを解脱に導き、アヴィッディヤー・マーヤーは私たちを束縛する、と定義づけられるのです。

**ヴィッディヤーの家族を養うために金を稼ぐ**

では金銭を稼いでよいのか、という問いの答えですが、スワーミー・ヴィヴェーカーナンダが『カルマ・ヨーガ』の講演で「家住者の義務は何か」という話の時に引用した、マハー・ニルヴァーナ・タントラ聖典はこう言っています──「家住者が稼がないのなら、それは罪である」。

昔、女性たちは家の仕事をしており、外で金銭を稼ぐことはしていませんでした。ですから女性たちは家住者の稼ぎに頼っていました。お年寄りも子供たちも同様でした。また社会の中で、病気で働くことができない人、貧しい人、ホームレス、出家僧も家住者の稼ぎに頼っていました。社会は家住者がお金を稼いでくれることで成り立っていました。それは今でもそうです。家住者が国に税金を支払ってくれるので社会は成り立っています。マハー・ニルヴァーナ・タントラはその意味で、「家住者がお金を稼がないのならそれは罪だ」と言っているのです。

ドッキネッショル寺院のシュリー・ラーマクリシュナの元へ、ある人が霊的な実践を積みたいとやって来ました。来客があるといつも尋ねるように、その時もシュリー・ラーマクリシュナは、どこから来たか、妻子がいるのかなどを尋ねました。妻子がいると答えたので、さらにシュリー・ラーマクリシュナは、残してきた妻子はどのように養うのかと尋ねました。するとその人は、「奥さんの父親がサポートします」と答えたのです。奥さんのお父さん？！　それを聞いてシュリー・ラーマクリシュナはとても怒りました。あなたに子どもがいるのはあなたの責任ではありませんか、どうして奥さんのお父さんが彼らを養わなければならないのですか、と。なぜならこれはとてもひどい話ではありませんか、結婚して子供がいるのにその父親ではなく奥さんのお父さんが子供たちの面倒をみるなんて、それはとても恥ずかしいことではありませんか？　シュリー・ラーマクリシュナはその人を大変叱って、あなたの義務は自分の家族を養うことです、そのために家に戻ってお金を稼いでください、と言いました。［👉『ラーマクリシュナの福音』ｐ5］

もし貯えが十分にあるのなら、家族から離れて霊的実践のために僧になるのもよいでしょう。しかし貯えがないのに家族を放棄するのはひどいことです。家住者の大きな義務は、金銭を稼いで自分の家族の面倒を見ることだからです。そして自分の家族だけでなく、社会の弱者や家住者の稼ぎに頼らざるを得ない様々な人たちの面倒も見ることも家住者の義務なのです。それが「ヴィッディヤーの家族」の説明です。家住者が「ヴィッディヤーの家族」のためにお金を稼ぐことは悪いことではなく、必要なことなのです。

**道徳的な方法でお金を稼ぐ**

次のシュリー・ラーマクリシュナの答は何でしたか？

参加者　「収入を増やす努力をしてもよろしい。ただし正直な方法でせよ。」

正直な方法、つまり道徳的な方法で、ということがとても大事です。非道徳的な方法には、嘘を言って騙す、詐欺、窃盗、横領、賄賂の贈収賄などがあります。

ヒンドゥ教の教えの１つに、家住者の人生の4つの目的を説いた「プルシャールタ」があります。その４つは、①ダルマ（道徳的正義）、②アルタ（富）、③カーマ（欲望の達成）、④モークシャ（解脱）です。ここで注目したいのは、人生の目的の中に「アルタ」が入っていることです。と同時に「ダルマ」も入っています。この教えは、「家住者は富を得ても欲望を追求しても良い、ダルマという条件をクリアすれば」ということです。「ダルマでコントロールをしている限り、金銭を得てもよい」──シュリー・ラーマクリシュナはそう言っているのです。

**家住者がつねに覚えておくべきことと、ヴィッディヤーのお金の使い方**

次にシュリー・ラーマクリシュナは、家住者がつねに覚えておくべきことについて言及しています。

参加者　「人生の目標は金を稼ぐことではなく、神に仕えることだ。もし金が神への奉仕にささげられるならそれは有害ではない。」

私たちの真の目的は神を悟ることです。そのための１つの形が、神をお世話することです。

稼いだ金銭をどのように使うかは、どのように稼ぐかよりも大事なテーマです。その方法を知らなければ稼ぎが無駄になる可能性があるからです。あるいは非道徳的な方法でお金を使う可能性もあるでしょう──今、若いインド人の中で飲酒に大金を注ぐ人が増えているようで心配しています。原因の１つは、たくさんのお金を稼げるようになったこと、しかしそれをどのように使えばよいのかの知識と訓練がないことです。

別の時、シュリー・ラーマクリシュナは、お金を使うより良い方法について話しました。衣服住、子供たちのため、将来のための貯え、貧困者・被災者・出家への寄付など、お金を使うさまざまな方法がありますが、何がより良い方法でしょうか、そして自分の感覚の楽しみ（快楽）のために使うのとそれ以外の使い道とでは、どちらがより良いでしょうか。

1つの答えは、道徳的な方法で稼ぎ、道徳的な方法で使ってください、ということです。非道徳的な方法で稼ぎ、非道徳的な目的で使うことがアヴィッディヤーで、道徳的な方法で稼ぎ、道徳的な目的で使うことがヴィッディヤーです。

そしてもう１つは、自分の稼ぎから幾らかを差し出して（あげて）ください、ということです。税金もそれに当たりますが、それは差し出さなければいけないものであって、それと自分の気持ちとは関係ありません。ですが「してあげたい」という自分の気持ちのために、心を広げるために、寄付を差し出すことはとても重要です。稼ぎのすべてを自分と自分の家族のために使うのではなく、その内の幾ばくかでもよいので「援助したい」という気持ちでお金を使うと、本当にそれは良い使い道だと思います。それがヴィッディヤーのお金の使い方です。

その結果、非利己的になります。稼ぎをすべて自分のために使うと利己的になりますが、良い目的のため、良いもののため、困った人のために自分の稼ぎを使うと非利己的になります。カルマ・ヨーガの１つの目的は非利己的になることでした。前回、スワーミー・ヴィヴェーカーナンダの「Unselfishness is God.」（「無私は神です」）という言葉を紹介しましたが、そうなるための偉大な方法が、少しでもよいから自分が稼いだお金を他人のために使うことなのです。そのことを別の時に、シュリー・ラーマクリシュナは話しました。

**📖４６頁下段　２行目**

**M「人はいつまで、妻子への義務を感ずべきなのでございましょうか」**

**師「彼らが衣食に困らなくなるまでである。しかし息子が自活できるようになったら、彼に対して責任をとる必要はない。ひなが自分でをついばむことができるようになると、それが餌を求めて母鳥のそばにやってくれば彼女はつついて追い返す」**

**（解説）**この辺りの説明は必要ないでしょう。

**📖４６頁下段　８行目**

**M「いつまで、人は自分の務めを行わなければならないのでございますか」**

**師「果実が現れると花びらは自然に落ちる。人は神を悟ったのちには務めをしなくてもよいし、そのときには、しようとも思わなくなる。**

**酒飲みが酒を飲みすぎると、意識を保つことができなくなる。二、三杯飲んだだけであれば、彼も仕事をつづけることができるだろう。お前が神に近づけば近づくほど、彼が少しずつお前の仕事を減らしてくださるのだ。恐れることはない。**

**目の前にあるわずかの務めを果たすがよい。平安を得るであろう。一家の女主人が料理をはじめとする家事一切をなし終えてに行くときには、背後からどんなに大声で呼びかけても戻ってきはしない」**

**（解説）**

**カルマがアカルマになる**

さいごの沐浴の話は、日本人にはイメージしにくいかもしれません。昔の田舎のインドでは家に風呂場がなく、外の池に水浴びに行くのが普通のことでした。主婦は家族に食べさせて台所をきれいに片づけたら、たとえば午後1時、1時半くらいに沐浴のために池に行きます──そのイメージをしてください──その時もしも旦那さんが相談があるから戻ってきて、と言っても彼女は戻りません。

この話は何の関係で引用されているのでしょうか。今、私たちはカルマ（仕事・義務）というテーマで話をしてきています。それが大事なポイントです。つまりこの話は、神を悟った後にはすべてのカルマはなくなる、ということの例えなのです。

ですけれどもそうであるならば、悟った直弟子たち、たとえばスワーミー・ヴィヴェーカーナンダは悟った後にたくさんの仕事をしていませんでしたか？　矛盾していませんか？

答えは、悟る前のカルマと悟った後のカルマは異なる、というものです。悟る前のカルマは義務であるが、悟った後はカルマとは言わず「アカルマ」と言うのです。バガヴァッド・ギーターでシュリー・クリシュナは、カルマ、アカルマ、ヴィカルマについて話をしていましたね。「カルマ」とは働くこと、「アカルマ」とは働かないこと、「ヴィカルマ」とは非道徳的な働き、という意味です。悟った人は、他の人と同じようにカルマをしているように見えても、アカルマ、つまり、本当は働いていないのです──矛盾しているようですが、それが悟った人の状態です。

では「カルマしていてもしてない」状態は、どのようにできますか？　質問を変えましょうか、カルマの源、カルマをさせる原因は何ですか？　欲望です。欲望があるから、その欲望を満たすためにカルマを行います。ではその欲望はどこから出ていますか？　エゴ（からだ・心・自我を合わせての「私」）です。しかし悟ると、エゴが無くなるのです。エゴが無くなり神があらわれます。「私は」は無くなり「神」になります。

たとえば求道者は「ナーハム　ナーハム　トゥーフー　トゥーフー」（私ではない、私ではない、神です、神です）という実践を、自分で努力して意識して行います。ですが悟った人は、それが努力なしに自然に行われています。悟った人は、仕事は神の仕事、神を喜ばせるために仕事をするetc.というカルマ・ヨーガの実践を、努力なしに自然に行っているのです。それが、カルマがアカルマになる、ということです。

アカルマの人に、カルマの法則は当てはまらず、よってその人がカルマに縛られることもありません。悟った人の源は神です。その人は皆の中に神を見てカルマをしています。それをアカルマと言うのです。ギーターはそのような人が賢い人だと述べています。

シュリー・ラーマクリシュナも、「今の仕事はすべて義務だが、悟った後はカルマをしても義務ではなく、神のお世話になる」と言っています。スワーミー・ヴィヴェーカーナンダ、サーラダーナンタジー、ブラフマーナンダジーはカルマをしているように見えたがそうではなく、神、シュリー・ラーマクリシュナのお世話をしていたのです。

**📖４６頁下段　後ろから３行目**

**M「師よ、神を悟るというのはどういうことでございますか。あなたが神のヴィジョンとおっしゃるのはなんでございますか。どうしたら、それを得ることができるのでしょうか」**

（解説）

これら３つの質問も、家住者にとって大事な質問です。Mさんは私たちの疑問を代弁してくれる象徴、シンボルであり、それが『ラーマクリシュナの福音』の特徴でもあります。ギーターでも、アルジュナが自分の混乱の解決のためにシュリー・クリシュナにさまざまな質問をしていますが、クリシュナは万人に向かって助言をするために色々と説明をしました。またそうでなければ、ギーターはクリシュナとアルジュナの個人的な会話、で終わってしまいます。しかしそれだったら私たちはギーターを勉強しないではありませんか。

『福音』も同じです。シュリー・ラーマクリシュナとMさんの個人的な会話集だと思ったら『福音』を勉強しないです。なぜ勉強するのか？　それはMさんの質問と私たちの質問が同じだからではありませんか？　私たちの代わりに、Mさんは尋ねているのです。私たちは『福音』を読んで思います、私もMさんと同じ疑問、同じ混乱ですと。ですから答えに興味が湧くし、それが勉強の動機と目的になるのです。ギーターも『ラーマクリシュナの福音』も、個人的なものでも個人のためのものでもなく、皆のための普遍的なものです。

**神のヴィジョンと神の悟りの違い**

神を悟ることと神のヴィジョンを得ることに、あまり違いはないですが、多少違います。神のヴィジョンは、深い悟りではなかった可能性があり、その1回で終わり、という可能性があります。しかし神を悟るとはもっと深いこと──神の本性をよく理解する、あるいは神との関係が深くなる──ということで、それが悟りの意味です。それに比べて、神のヴィジョンはもう少し浅い経験です。

想像してください、ある客があなたに1度挨拶に来ました。それ位では、その人との関係は深くならないでしょう？　あなたはその人のことを知っているけれども、まだよく知りません。その人の仕事や家族、好きなものは何かをあなたは知りません。それが、神のヴィジョンの状態です。しかし神の悟りはもっと深いものです。神を悟ると、神の本性は何かも、神と私の関係性も、神のさまざまなご性質も理解し、神と自分の関係がより深くなります。

**「神」とは**

ここで「神」について少し説明します。皆さんは言葉では「神、神」と言っていますが、「神」についてのイメージにはいろいろあるからです。たとえば仏教は真理について語っていますが、神についてはあまり語っていません。しかし仏教徒は「神」という言葉を普通に使っています。また神道でも「神」という言葉を使います。ですが私は尋ねたい、あなたが祭壇の前でお辞儀をして神に祈るとき、その時の神のイメージは何ですか？　はっきり説明できない人も多いのではないですか？　本当は分かっていないのかもしれません。分かっていないから説明できないのかもしれません。

それはインドではほとんどありません。神についてのイメージをインド人に尋ねれば、各々でイメージは違うものの、神について、絶対に明白なイメージを持っています。シヴァの信者だったら神のイメージはシヴァ、ヴィシュヌの信者だったらヴィシュヌ、などというように。キリスト教徒も神の説明はできなくても、イエスをイメージするでしょう。しかし日本ではそのようなことは稀で、日本の仏教徒に尋ねてもブッダのイメージは出てきません──前インド大使が興味深いことを言っていました、日本では寺院でブッダの像を見ることがあまりない、その宗派の創立者の像は見るが、と。

そこで私は「神」についてまず説明をします。それを理解しなければ「神のヴィジョン」も「神を悟る」も分からないからです。「神は何ですか？」についての説明は、Mさんの3つの質問の、さらに基礎的な質問です。

**神の4つの姿**

神には4つの姿があります。世界の全宗教が、次のいずれかのイメージを持っています。

①「形もない、性質もない」（Nirākāra-Nirguna：ニラーカーラ・ニルグナ）

②「形はない、性質がある」（Nirākāra-Saguna：ニラーカーラ・サグナ）

③「形もある、性質もある」（Sākāra-Saguna：サーカーラ・サグナ）

④「神の化身」（Avatāra：アヴァターラ）

①のコンセプトは、ヒンドゥ教独特です。ユダヤ教、キリスト教、イスラーム教にはありません。ユダヤ教、キリスト教、イスラーム教のコンセプトは②です。形はないが、性質（宇宙を創造維持破壊する、全知全能遍在、カルマの結果をあげるetc.）はあります。③は、たとえば弁天様、天照大御神、ドゥルガー女神etc.で、それらの絵画もあります。

世界の全宗教の中で、ヒンドゥ教だけが４つすべてのコンセプトを持っていて、包括的と言えます。たとえばアヴァターラのアイディアはイスラーム教にはなく、預言者、プロフェットという言葉を使っています。キリスト教はイエスを、特別な息子、only begotten son of Godという言葉で言い表しています。また仏教は仏陀のことを神の化身とはイメージしていません。しかしヒンドゥ教では仏陀を神の化身の一つと考えています。

詳しい説明は次のクラスで行います。

**（賛歌奉献）**（映像データの１：３６：１８頃）

「トゥミ　ブランマー　ラーマクリシュナ　トゥミ　クリシュナ　トゥミ　ラーマ」

**（Q＆A）**

**Q）**ニラーカーラの例を挙げてください。

**A）**たとえば、心の形はありますか？　ないですね。たとえばガスやH2Oの状態の水も形がありませんね。目に見えない。それがニラーカーラです。

**Q）**サットチットアーナンダを神様の本質と思ってよいでしょうか？

**A）**サットチットアーナンダはグナとは言わず、ネイチャー、本性と言います。本性は性質ではありません。たとえば私たちの本性は魂ですがそれは私たちの性質ではないでしょう？　ネイチャーとクオリティは異なります。性質はある時にはあり、ある時にはないものです。一方、ネイチャーとはそのものが無かったら、そのもの自体も無くなるというものです。サッチダーナンダは性質ではなく、ネイチャー、本性です。

**Q）**それを本質（エッセンス）と捉えてもよいですか？

**A）**よいと思います。エッセンスがないと、そのもの自体が無くなりますから。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　以上